

第二編 獸毛

馬

毛

馬の祖先は今から五千万年前に現われた。当時は現在の馬のように一本指でなく四本指で、大きさも小犬程であつたものが、だんだん体も大きくなり、首も長くなり指も一本に進化したもので、その間四〇〇万年位かかつていると考古学でいわれている。馬を人が使う様になつたのは、西暦紀元前二千五百年頃、東部ヨーロッパの草原にいた野生の馬がインド、ヨーロッパ人によつてはじめて飼馴らされ、最初は鞍馬として用いられ、紀元前二千年頃にアーリヤス人種に属するヒッタイト人が戦車を駆つてシリヤに侵入しバビロンを亡すと共に、この地方へ始めて馬をもたらしたといわれる。その後アッシリア人は此の馬を騎乗に用いた。ペルシア帝国の勃興も騎乗馬の利用に負うところが大きかつたといわれて居る。

更にヒクソク人が紀元前千八百年の中間帝国の時代の末に、エジプトを征服した時、はじめてここへ馬を伝え、後に紀元前千五百―千四百年頃の新帝国時代にエジプト人はこの馬と戦車とによつて西アジアに大帝國を建設したという。

一方紀元前千四百年頃アーリアス人がイランからインドのバンジャブ地方を征服し、その時はじめて馬をインドにもたらしたと云いギリシャへはアーリアス人が紀元前千八百年頃、馬を伝え紀元前千七百年頃にはすでに戦車をひくために用いられたといわれている。

紀元前千三百年―千二百年頃、中央アジアの草原地方にスキタイ人や匈奴などが騎馬用としての馬の利用を、いちじるしく発達させた。秦の時代にはこれ等の蕃族が馬を駆つて中国を襲つたので、これがため始皇帝が万里の長城を築いた。当時の馬は今の自動車にも戦車にも比すべき重要な役割を果して居つた事を知る事が出来る。

日本に於て馬にのるようになったのは、ヨーロッパからシベリヤ、朝鮮を通じてその方法が伝わつて来たらし
いとされて居るが、然し貝塚などから掘り出される馬の歯や骨などから見ると日本の馬はそれよりずっと古く新
石器時代（二千年以上前）からおつたようで、この時代には主として食用に供せんがために家畜となつて居つた
ようで、使役に用いたのは湖上生活時代の末期であろうといわれている。又一方我国の馬の起源は遠く神代に迄
さかのぼり、馬に鞍を置いて乗つた事も（日本書記）の伝説から読まれる。

神代に既に日向馬として名声があり、霧島の山すそに野生の馬を集めたという（馬集田）の土地名も残つてい
る

（古事記）に

以^{もつて} 馭^{はばまつ}使^{つかむ}

とあり景行天皇の段に早馬の使を四方に馳せた事がみられ、日本書記に十五代応神天皇の十五年秋八月、百濟^{くだら}の
王^{こしき}、阿直岐^{あちき}をして馬二匹を貢らしめき、とありこの馬を阿直岐^{あちき}をして掌^{つかもと}り飼はしめた、とあるので、それま
では馬の飼いかたも知らなかつたのではないか、との説もある。

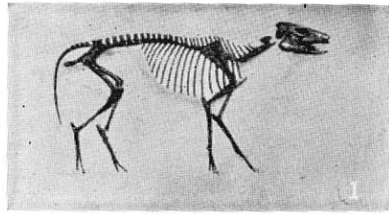
二十一代雄略天皇の条に伯孫^{またら}が驄^{またら}の馬（青と白の交り毛の葦毛）の馬を得て、欲び厩に入り鞍を解き秣^{まぐ}馬か
ひて眠りたり、とある、更に二十六代継体天皇の条には、河内の馬飼^{うまかいのおびと}首荒籠^{あらか}とあり、二十九代欽明天皇の条に
は

助軍數一千、馬一百疋、船四十隻遺

の記録がみられる。



昔
の
旅



馬の祖先は五千万年前に現われた



農
耕
馬



都井岬の野生馬

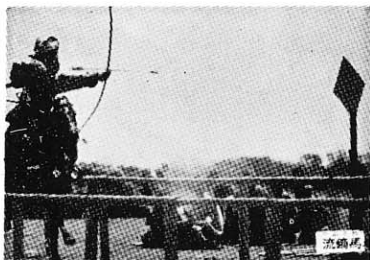
馬産地原ノ町の野馬追い



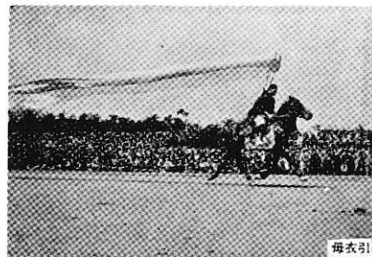
馬産地原ノ町の野馬 追い



草千里の放牧



流 鋼 馬



母 衣 引

皇極天皇（三十五代）大化元年、京都との交通連絡を保つため駅馬、伝馬を置き、駅馬は大宰府に至るために置かれ、伝馬は地方に行くために置かれたのである。それ故官用にて旅行する人には伝馬駅鈴を賜わることとし、御用の馬に限つて鈴をつけ、私用の馬には之を許さなかつたのである。

（万葉集）に

鈴が音の早馬はやうまの堤井つみの

水を賜へな妹が直手なてよ

とあり鈴をつけた公用の駅馬のことが知られる。

（枕の草子）春曙抄百十四段の注にうまやについて

今の馬つぎ宿々也。和名云駅うまや。唐令云

每三三十里一駅。若地勢險阻及無二水草一処

随レ緑置レ之

とある。

駅は大化改新当時、主として官用の旅行者に対しての人馬等の乗継場所で鎌倉以後は、宿もしくは宿駅と呼ばれ江戸時代には宿場と改称された。大宝令では駅の近くのものは、課税を免ぜられた代りに駅の雑務即ち馬の飼養駅田の耕作、駅丁の仕事等をしなければならなかつたという。

鎌倉時代以後は商品経済の発達、社寺参詣等交通の増加に伴い交通の要地に陸上交通輸送業者が現われ駄馬によつて輸送した。これら民間事業を馬借と呼んでいたとある。

日本書記によると天智天皇の元年七月、近畿地方に牧場を設け、馬を飼うということが記述されており、これが牧畜のはじめであるといわれる。

また馬を用いる兵隊をつくつたのは天武天皇の時代で、慶雲二年十一月新羅の使節が入朝した時に、紀古麻呂が騎兵大將軍に任ぜられて職につき、天平十二年十月聖武天皇が伊勢に行幸された時には、多くの騎兵が警衛したが、この制度は奈良朝以後とだえてしまつたという。

文武、元明、聖武、称徳、桓武、嵯峨、の各朝にそれぞれ馬の必要を感じて飼馬を奨励され、唐政にならい馬政に関する法律も出たよう、国内戦争の多かつた日本では馬は軍用として盛んに使われ、馬にのる方法や馬を使った戦術も発達し武士の間では馬はこの上なく大切にせられ宇治川の先陣を争つた生月・磨墨の二名馬をはじめ、かずかずの名馬を生み出した。

また鎌倉時代の頃から武士達の間で馬の上で弓矢を使う

流鏑馬ヤブアス

笠懸

犬追物イヌオモヒ

などの催しをはじめ戦国時代から江戸時代に至るまで行われた。日本に於ては農耕には他のアジア諸国と同じように牛を多く用いたが交通運輸の方面で馬の果した役割は大きく、人が自分の足で歩いた古い時代と鉄道のひかれた十九世紀との中継ぎを果したのは馬であつた。

古代にあつては宿屋はなかつたので、貴族たちは村の長者のうちにとまつたが、庶民の旅人は食糧も夜具も持つて旅をした。貴族でも村のないところでは草枕の旅をしなければならなかつた。日常の食生活もおそまつな時代、一般庶民は旅をするとなると、携行食料は干飯ほじいや水産物の干物ひもの、木の実を携行、他に現地現地で間に合う食用に

なる野生の草や木の実などで飢をしのぐより他はなかつたのである。だいたい日本人はもともと二食が普通で三食になつたのは鎌倉時代から室町時代にかけてだといわれるが、二食にしても補給の出来ない時代、ながい旅の食料携行は困難な事であつたであらう。

万葉集

草枕旅の宿りに誰が夫か

国忘れたる家持たなくに

とあり古い時代の旅人は食糧が絶えて、道路や谷間などに飢死する数も少なくなかつたが、馬はこれら苦難の旅人をたすける大きな役割を果したのである。

旅籠（はたご）とは、もと馬の飼料を入れる籠のことで、王朝時代旅籠は馬の飼料を供給し、また看板にこの籠を店頭に下げておいたので「はたごや」とよばれるようになり、はたごには馬の飼料、間代、薪代などを仕払うのであるが、通貨のない時代とて旅人は軽い絹のような物資をもつて旅をして物で仕払つたのであらうと考えられている。

宿も徳川初期迄はただ雨露を凌ぐだけで、食事や寝具は供しなかつた。街道筋に宿屋が出来飲食を給するようになったのは元禄以後のことといわれる。

さすらいの詩人芭蕉の奥の細道の一文中

那須の黒羽くろはねと云ふ所に知る人あれば、是より野越えにかかりて、直道すぢみちをゆかんとす、遙はるかに一村を見かけ
て行くに、雨降り日暮る、農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行く、そこに野飼ひの馬あり、草

刈る男になげきよれば、野夫といへども、さすがに情しらぬには非ず、いかがすべきや、されども此の野は縦横にわかれて、うひうひしき旅人の道ふみたがへん、あやしう侍れば、此の馬のとどまる所にて馬を返し給へと、貸し侍りぬ、……頓て人里に至れば、あたひを鞍つぽに結びつけて、馬を返しぬ。

とあり、果ても知れぬような原の中で、見も知らぬ人に馬を貸し、借りたものも人里に来てその駄賃を鞍に結びつけ、馬の尻をたたいて今来た道へ返すという、誠に今の世代に見られぬような素朴な情景、これが元禄四年の事であるが、同じ江戸時代に

見つかつて馬盗人は乗つて逃げ

の川柳もある。

しかし国内でのこの馬の利用も武士や官吏とその従者だけが利用していたので、一般庶民や商人が馬によつて運搬が出来るようになったのは江戸時代に入つて余程経つてからである、といわれている。

旅人が馬の背にのつた時代から、かごや車を馬にひかせるようになり、その馬車も二頭から四頭、更に八頭だて迄発達した。主な街道にはどこどころ駅を設け何頭かの馬を用意して定期的に走る馬や、急の旅行者に役立てて、この交通面をとおして人間の文化経済に大きな力を尽した訳である。

(風土記)によれば、わが国も古より国内の殆んど至る所に駅(官道交通のための駅馬を置くところ)のあつた事が知られる。

第四十代天武天皇の時代には官吏に対して乗馬飼養令なるものを出して、乗馬の術に長じ兵を行うに巧みなる

ものは重罪を犯したる場合も之れを減刑すべしとて、兵力拡張のため乗馬、武芸を奨励しており、徳川時代にも牛馬が最も必要且つ大切と考えられ、その登録を命じ、熊本県では寛永十年百姓に牛馬を飼う事を命じ、牛馬を
持てない百姓は娘を売つても牛馬を飼えと命じている

古くから馬増産の歴史は、各国とも戦争目的のためであつて、日本でも明治以来の馬政計画は第一に軍馬を確保する事にあり、総馬数百五十万頭を目標に常時六万の軍馬を保持し、産業馬もその予備軍と考えられ、そのうち二十万頭は軍用保護馬として鍛錬されていたが、これが第二次世界大戦では約六十万頭の犠牲消耗を強いられたといわれる。

かように軍馬に交通に農耕に馬を使う方法は進歩したのであるが、馬そのものの改良は日本では殆んど行われず外国種の馬を輸入して、品種の改良をはじめたのは一九〇六年で、日露戦争での騎兵の体験がもたなつて居るといわれている。当時の馬の九三・三％は在来種であつたが、これが殆んど外国種とかけ合わされ、今日では日本の馬は殆んど雑種となつて居る。質も大変よくなつて代々かさねて外国種とかけ合わされたものの子孫は、外見殆んど外国種とちがわない

今残つて居る純粹の在来種は北海道の約一千頭と長野県の本曾馬が約五百頭、宮崎県の都井岬の御崎馬がごくわづかいるだけであつて、このみさき馬は（天然記念物）として保護されており此の馬の背中にカラスがとまつて、馬に寄生するダニ類をたべているところなどをみることがある。まつたくの野生馬であるが、これは元禄十年藩主秋月家が、力の強い戦闘馬をつくるため放したのがこの御崎馬（みさきうま）のおこりで、今にうけつがれて来たものという。

鹿兒島宝島特産のトカラ馬は県の文化財に指定されている特殊な馬であるが、絶滅の危機にあるので薩摩半島の最南端の開聞山のふもとに放牧、増殖する事になったという。

戦後急を要する農地開拓に、輸送に、馬を要求される面が多かつたので従来の実績や当時の要求を考慮し総馬数百万頭を目標に毎年十二万頭が殖産され、其の資質も軍馬から産業馬への転換、さらに利用度の高い優秀馬への改良に努力が傾けられてきた。

馬を一番沢山飼っている地方は北海道で日本全体の二割五分を占めている。その外、東北の岩手、青森、秋田、福島や南九州の鹿兒島、熊本などが馬の主産地となつて居る。

そのうち最も古くから牧場として発達したのは長野県のものである。古え国内牧場の中心であつた信濃国の牧場の起源は、史実に表われたものとしては延喜式であるが、これによれば信濃国は古代に於ける官設牧場の中心で、信濃に次ぐものは甲斐国であつた。そして馬を貢する国は全体で十五ヶ国であり当時々朝廷に貢する貢馬の総数二百四十頭、そのうち信濃国は十六牧場で八十頭を貢上し全国第一位の盛大さを物語つて居つたのであるという。

(世界年表)によれば延喜十年八月(約千二五年前)醍醐天皇(六十代)信濃御馬天覽とある。
降つて平安朝の末期に武士が関東に勃興するに及んで全国の牧地牧馬の中心点は信濃、甲斐などの山地を去つて武蔵、上野の平地に移り、更に転じて陸奥、出羽に移り、以て奥州産馬の発達を來したのである。

しかしながら爾來近世から現代に至るまで、長野県の地勢風土は自から牧畜に適しているので県下到るところが存在して放牧、繋飼共に盛んに行はれ、特に南、北佐久郡を中心とする一帯と、木曾谷、伊那谷を中心と

する一帯は現代に於ても馬産地として広く知られている。
長野県に於ける飼養頭数を記せば

年次別

明治十五年	六七、〇七七頭
二十年	七十二、五四七
二十五年	六七、五二八
三十年	五九、四四七
三十五年	五八、五六二
四十年	五〇、〇四七
四十五年	五二、〇九六
大正 五年	五二、六八三
十年	四八、五一八
十五年	四六、二一九
昭和 五年	四〇、三五〇
十年	三九、三五六
十五年	不明
二十年	三一、八〇七

二十五年

三二、四二七

三十年

二六、〇〇〇(推定)

郡市別(昭和二十八年八月一日現在)

南佐久郡

一、五七二頭

北佐久郡

九一五

小県郡

三九七

諏訪郡

二、三一三

上伊那郡

四、五三五

下伊那郡

一、八二八

西筑摩郡

三、六四五

東筑摩郡

二、五三九

南安曇郡

一、七二四

北安曇郡

一、六五七

更級郡

六三八

植科郡

一二三

上高井郡

三一二

下高井郡

一、〇〇一

上水内郡

一、七七一

下水内郡

五八六

合計

二五、五五六頭

全国馬飼養頭数

昭和二十五年

一、〇七一、一三一頭

二十八年

一、一一一、九七三頭

となつて居る。

長野県産馬の特徴

長野県の馬は、その改良過程及び資質、体型等の面から二つの型に分けることが出来る。

即ち

(1)所謂、一般馬と俗に言われる洋種血液をもつて改良せられた種類称呼上の中間種であつて、これは南佐久郡下を中心とする木曾谷を除いた地方で生産される。体高一、四五米内外の中型農馬用のものでその体型上の特徴は外国馬と同型である。

(2)他の一つは長野県の特産とも言われる木曾馬であつて、これは木曾種と呼ばれ西筑摩郡及びその周辺において生産される小型農馬用。体高一、三〇米内外の小格馬で外貌上の特徴は、たて髪まえ髪、尾毛等が極めて豊かで斜尻、肋腹の発達が良く顔は稍々短かく額広く鼻梁稍々凹み関節堅牢にして一見野生的の馬である。

この馬は良く粗食に耐え殆んど草のみで飼われ、山野の歩行が巧みで長命、一般馬より約五年以上長く使役が可能等の特質をもち、現在実用的小規模経営農馬として広く販路をもつている。

将来の増減の見通しは、

終戦後軍馬の解消と共に大きく用途の制限を余儀なくされ、かつ酪農振興の時代となり、反芻獣の増加と反比例的に減少している。従つて今後とも終戦直後、数年に見たような急減はないにしても漸減するものと推察されるが、又反面経済事情の変動、馬資減の減少等により現状の一〇二割減程度で、それ以上は減少しないのではないか。又、木曾種等はこの辺で一応安定線となり健全なる馬産事業が営まれるものと思われて居る。また馬の生産目的も一面食糧向けにと移行しつつあるものようである。

岩手県盛岡を中心とする南部馬の産地で日本屈指の牧場として多くの名馬を産出した小岩井牧場も経営が多角化し牛を主とした酪農センターとなつたが、此の地方は伝統の馬産地で南部の曲家という農家建築は馬を家族と考へて一つ家に住むという方式。たいていの農家は二三頭の馬を持つて繁殖や育成を続けている。

競馬用サラブレッド種は英国で競馬により二百年以上もかかつて、この馬種を創造したものであるというが、わが国の競馬は明治三十九年頃から行われたといわれ、古くは文武天皇の大室元年五月端午節の儀式に武徳殿にて競馬の催しがあつたのがわが国歴史上最初であり、その後は代々五月に競馬が行われていたが、藤原氏の時代に中絶されたという。

北海道は第一の馬産地で特に日高は競馬用の産地として知られている。

日高に牧場が開かれたのは明治のはじめ北海道伝来の道産馬を、ここの原野に放し飼ひした時にはじまり、

雪が少なく、日高の山麓は広く、手をかけなくても十分育つた。しかも大地は石灰分が多いので、骨のしつかりした馬ができる事もわかり、開拓使（道庁の前身）も、アメリカから招かれた開拓顧問ケブロンらも、北海道を完全酪農国にすることを理想としていたから、アメリカの家畜がどんどん渡道してきた。その中に競馬馬もはいっていて、やがてサラブレッドもはいり、品種改良につとめ、こうしたなかから競馬用にすぐれているものがスカウトされ、それが評判を高め、ことしはサラブレッドとアラブをあわせて約二千三百頭の繁殖可能な軽種馬がおり乗馬や競走を主とする軽種、車引きや農耕を主とする重種、その間の中間種があり、軽種は日高で全国の約半数を生産し、道内ではこのほか胆振にも大牧場があり、重種は十勝、北見、釧路が名産地で、釧路にはクシロ種という優れた中間種があると「きたぐにの動物たち」がたたえている。北海道を旅行する人は、果てしない草原に多くの馬が放牧されているのを見る事が出来る、そしてその規模の雄大さは北海道の誇る風物でもある。

また北海道にはこの土地特有の道産馬がある。

（きたぐにの動物たち）に野生化した消耗品としてくわしく述べられている。

昔道南にニシン漁の中心があつたころ、漁場でニシン運びに東北地方より馬をつれてきた、それまで北海道に馬がなく、アイヌは馬という動物を知らなかつた、しかしこの馬は家畜以前のもので、春ニシンの漁期が終わればチリ紙のようにすつぽかした、ところがすつぽかされた馬の消耗品のなかには、厳寒と雪の冬を生きぬき、オオカミやヒグマからものがれて、次の漁期まで健在のものがあつた「これは便利だ」というので漁場ではこれを拾つてまた使つた。馬にとってはヒドイ話だが、こうして捨てられたり、拾われたりするう

ちに野生化して自然状態のまま日本古来の小型馬の特徴を残した「ドサン馬」という品種ができてしまつた。しかし使いなれてみると、道産馬はたしかに便利であつた、体は小さくても、毛が長く寒さに強く、足が速くて熊やオオカミから逃げる事もうまい。めちやくちやな粗食でも平気だし、背がひくくて手軽だし、要するにロバと似た長所があつたわけだ、「ゲタのかわりだ」などと軽蔑されながらもなかなか役に立つていた。

明治にはいつて開拓が強力にすすめられはじめると、原始的環境に強い道産馬もふやされて一番多い明治四十五年ごろには九万頭以上になつた、とくに釧路や根室地方には広い土地がありミヤコザサという栄養価の高くて比較的やわらかいササが多かつたから、道産馬の原野放牧が盛んであつた。

夏の間は青草があるから飢えることはなく、荒野をほつき歩いてはいるが、冬にはいつて雪がつもり零下三十度にもなる道東の冬、馬たちには命がけの毎日である。一メートルもつめた雪の下からミヤコザサを掘り出すことが先づ生きのびる為の第一条件になる。はじめて放り出された馬は、いつたやうやつて掘りだしたらいいか知らないで、先輩馬が掘つたあとのオコボレをちようだいして、やつと息をついていた。二年目位ぐらいからは、前足で雪を掘りくずす事が出来るようになる。「馬の寒ざらし」だの「雪中放牧」だのと負けおしみたいによばれて居るが、「ニシン運び」時代に冬捨てられたのと大差はない。

夜は特に寒いから眠る事も出来ず、原野を走り廻つたり喧嘩したりして過した。わき腹にはツララがいつぱいぶらさがつていたので、走るとそれが林の中にガランガランなりわたつた。朝になつて太陽が出てから立つたままいねむりする有様だ。

しかし積雪も一メートル以上になれば、なれた馬でも掘りきれなくなる。こうなると雪の上に首だけ出して、とりにいる馬のタテガミやシッポの食い合いだ。弱い馬はすっかり食われて仕舞つて、毛が無くなつている。これを救うといつても、遠いから食料を運んでやる訳にもゆかず、立木を切り倒してやると、人の指ほどの枝まで食つてオガクヅみたいなフンをした。この切倒し作業中、人夫がもつて来た弁当を失敬し、ぬいでおいた着物まで食つて仕舞つた事がある。あるときなどワラジをはいっていた人夫が、足ごとくわえられて振りたくられた。こんな状態が続いて大部分の馬が死んでしまつた牧場も珍しくない。

道産馬は在来の馬の意味で、大正時代から減りはじめ、いまでは純粹なものとは千頭たらずではないかといわれる。道産馬の故郷松山地方では今も冬に野放ししている。道産馬は冬放牧しないとダラダラしてだめになるのだ。

とのことである。

因に北海道では人間も道出身者を道産子と呼びアイヌは道産子も内地人をも「シヤモ」と呼んでいる。馬の改良に輸入されている主なるものを挙げると

アラビア種

アラビア半島にひろがるアラビア大砂漠に住む野生の馬をアラビア人が長い間かかつて改良したもので、94き付くような日ざしのもので飢えとかわきに苦しみながらの長旅にも耐える。体は小さいが飼いやすく丈夫で乗用に適し、高さ一四五種、体重三〇〇疋ぐらいで整つた形をし今日では殆んど全世界にひろがつている。秀れた改良馬はこれをもとにして作られ、日本に於ても立派な成績を挙げている。

サラブレット種

特に競走馬として作り上げられた種類で馬の中でも一番足がはやい。

人のスピードの二倍の速さで走るの普通である。

アラブ種系統の馬と、イギリス原産のものをかけ合せたもので長い間の改良の結果でき上つたものである。栗毛の鹿子で、高さ一六〇—一七〇糎、体重四一—四七〇斤、気品に富んだ姿で遺伝も秀れている、粗雑な飼い方をするとき弱る、すべての馬の改良に利用され、日本でも明治以来沢山輸入している。

アメリカン・トロッター種

フランスやアメリカで行われる競走のためにつくりあげられたもので、速足にかけては他に及ぶものがない。

アメリカ・ヴァージニア州に古くからいたものとサラブレットとのあいこで一五五—一六五糎の高さで筋肉は割にやせて引きしまっている。

競走の他に車をひかせたり乗用に用いたりし、主に北海道の改良に利用されている。

アングロ・ノルマン種

フランス産のノルマン馬にイギリスのハックニー種とサラブレット種をかけ合せたもので乗用に用いたり、車をひかせるもの（大型と小型の馬あり）競走馬等である。

型に依り体格は異り一五〇—一七〇糎、丈夫でおとなしく使いやすい、日本では中間種の改良をするのに一番適した馬として乗用型と小型鞍馬型とを輸入し引続き成績がよいので用いられている。

驪 (黑毛)



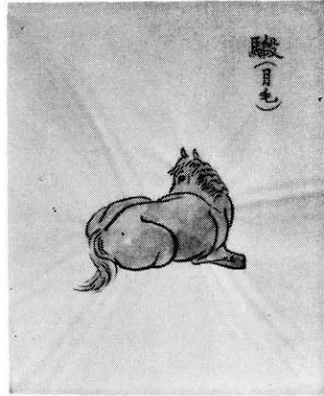
驥 (連錢韋毛)



白驄 (白韋毛)
鶻 (黑韋毛)



駁 (月毛)



騷驄 (青韋毛)
鶻 (青黑色)



駟油馬 (青槽毛)

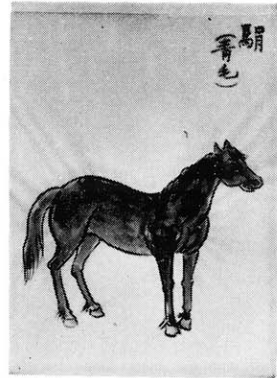




驄 (雲雀色)



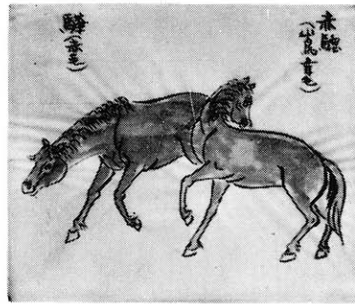
騮 (鼠毛)



驥 (青毛)



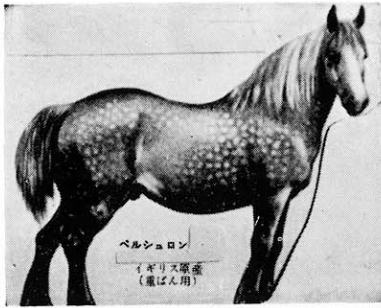
駱 (川原毛)



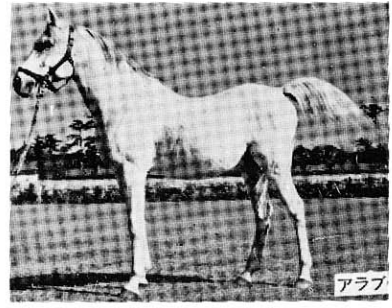
赤驄 (鹿茸毛)
赤毛



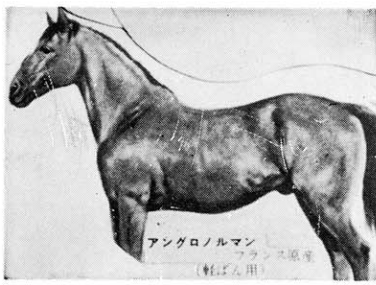
雪の放牧



ベルショロン
イギリス原産
(重ばん用)



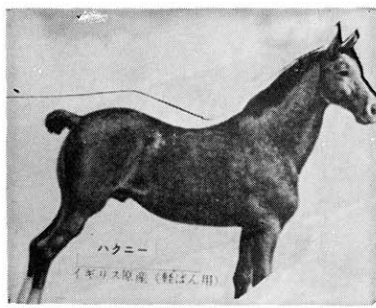
アラブ



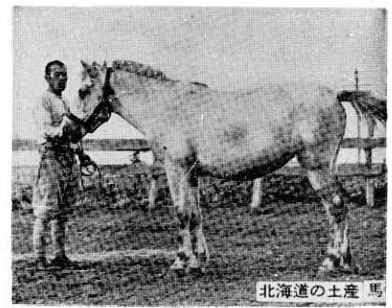
アングロノルマン
フランス原産
(軽ばん用)



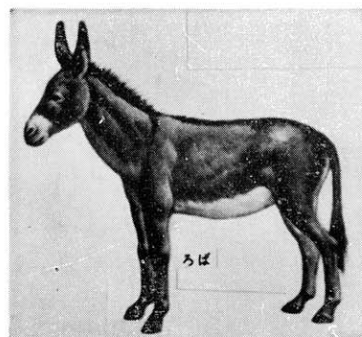
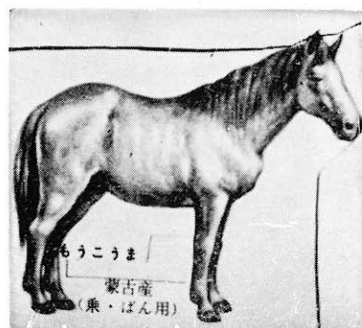
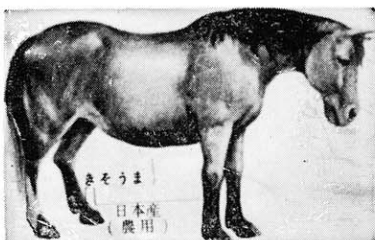
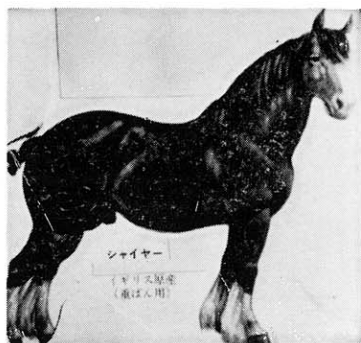
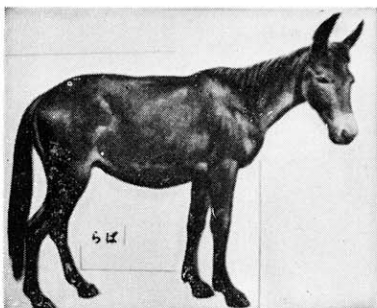
サラブレッド



ハクニー
イギリス原産 (軽ばん用)



北海道の土産馬



ペルシユロン種

重種に属し、重い荷物や大きな農具を専門にひく輓用馬。原産地はフランス、ペルシユ地方で、はじめは乗馬として中世には武士をのせ、その後、荷を引くことを主な目的として改良され体の太い重い馬に仕立てられた、小型は一五〇—一六〇糎で大型は一六〇—一七〇糎、体重六〇〇—七〇〇斤もあり、日本の重種の改良に一番適したものとて、アメリカ、フランスより輸入されている。

アラブ

この馬はアラビア半島の中央部、ネジト地方の原産で、昔からアラビア人はたいへん馬が好きで、かわいがり、持久力ある乗馬の改良を行つた。この種は世界にひろまり現在の改良馬種にアラブの血液の混らぬものはないくらいだといわれている。体は小さいが、優れた体型で性質温和、持久力に富み、乗用に適し、速力はサラブレッドについて速く、粗食にたえ、各地の風土になれやすく、遺伝力の強い馬である。毛色は芦毛が多く栗毛、鹿毛もいる、体高一三四—一五〇糎

アングロアラブ

フランスで、アラブとサラブレッドを交配した馬で、二つの種類の中間の特性をもつている。

性質伶俐、速度と持久力に長じ乗用馬として理想的である。体高一四六—一五八糎

ブルトン

フランス西部のブルターニュ半島の原産、海岸地方のものは、大型で体が太く、体高も高いが、山地帯のものは小型でブデイー・ブルトンと呼ばれ、わが国の農馬改良原種として、近年相当数、フランスから北

海道に輸入されており重鞍馬として農耕用に適している、体高平均一五六糎

ペルシユロン

フランスのペルシユ地方の原産重鞍馬で農耕用に適し性質おとなしく成熟も早く北海道には古くから輸入され農馬に利用されてをり、毛色は青毛、芦毛があり体高大型一六〇—一七〇糎、小型一四三—一六〇糎馬の体高

馬のせいの高さは前足の爪の底から背峯（鞍をおく時その前の方にとび出て見える骨）迄の高さをはかるのである。

いまの馬は五尺以上の馬がざらであるが、昔の馬は四尺五寸の馬でさえ大馬だと驚いたといわれる。

那須の与一の 夕顔

義経の 青海波

範頼の 月輪

畠山重忠の 鬼鹿毛

など、いづれも四尺七寸の馬で宇治川先陣の佐々木高綱の馬、生月は四尺八寸であつたという。

毛色による名称

馬としての色分けを大別すれば、栗毛、青毛、鹿毛、芦毛、月毛、河原毛等に区分けされそれを更に細別すれば

栗毛のなかに

白栗毛、紅梅栗毛、紅栗毛、栃栗毛、尾花栗毛等に分けられ

青毛には

すみくろ 驪 水青、生毛青などがあり

鹿毛には

黒鹿毛、白鹿毛、紅鹿毛、金鹿毛などに区分けされ

芦毛は

栗芦毛、青芦毛、鹿毛芦毛、白芦毛、尾花芦毛、刺毛、糟毛、連銭芦毛などに細別され
月毛も

泥月毛、錆月毛、紅梅月毛などに分けられ

河原毛も

鴨河原毛、白河原毛、鼠毛などといわれている。

これ等、毛色から名づけた武将の馬に

源義経

太夫黒

源義仲

鬼芦毛

源義家

源太黒

熊谷次郎直実

権田栗毛

上杉謙信

空生白毛

明智左馬介

大鹿毛

巴御前

春風芦毛

加藤清正

はね鴝毛(ときげ)

佐々木高綱

生唆栗毛

梶原源太

磨墨

などがある。

白(はく)

馬は頭や四肢の一部に全身の毛色と異つた白色の毛がはえているものがあつて、これを白(はく)と呼んでいる。

前額にある白毛の小斑を小星、中星、大星などといい、星の形によつて環星、細星、宝星、楔星、などと呼ばれ、この星が額から鼻の上に流れているのをその細さの巾によつて細流星、中流星、広流星、長流星、半流星などと呼ばれ、流星の方向によつて、直流星、曲流星、左斜流星、右斜流星と呼ばれている。馬の肢の白(はく)は白のある肢の数で一白から四白までその前後左右の肢の位置をつけて呼ぶ、左前一白、右前一白、前二白、左二白、右二白、左前右後二白、右前左後二白、左後一白、右後一白、後二白、前左後三白、前右後三白、後左前三白、後右前三白、四白となる。

馬の旋毛もその位置によつて

珠 目 両耳下から鼻梁の中央にある

櫛 <small>くし</small>	頬 <small>ほ</small>	眼 <small>め</small>	見 <small>見</small>	面 <small>め</small>	華 <small>け</small>	血 <small>け</small>	芭 <small>ば</small>	柏 <small>はく</small>
擗 <small>がらみ</small>	辻 <small>つぎ</small>	下 <small>した</small>	上 <small>じやう</small>	山 <small>さん</small>	粧 <small>しやう</small>	酔 <small>よ</small>	蕉 <small>しやう</small>	生 <small>せい</small>

胸さき両側下部

ひばら部

額部両耳の下線以上

鼻梁中央から鼻孔まで

両耳外側から眼の側にある

眼の上

眼の下

頰の後部一円

頰の前方鼻孔にいたる一円

などと呼ばれる。

馬は生れるとすぐ井戸の神様迄歩いて行く、と云う言い習わしが地方によつて伝えられて居るようであるが、真偽の程は兎に角、馬は生れてすぐから歩くことは歩く。また、発情した時、唇をゆがめて笑う様な表情をするが一般の人は、これを馬が笑うと云つて居る。

痛い目にあつたりすると涙を出して悲しそうな表情をする、これを泣くと言つて居る。

馬の尾はハエがよつてくるとハエたたきの役をしている事は、誰でも知つて居る事であるが、他の動物同様、尾の動きによつて、いろいろ表情の区別がある。

馬は一年に何回も年を取るなどという（地方馬産地でもそう云つて居る所がある）もあるようであるが、一

年一回年を取るの（何歳馬）と云えば人間と同じ年令の数え方である。

馬の寿命は、世界の記録としては五十才位の記録もあるが、大体二十一二十五位が最長の寿命であろうが、多くの場合経済価値は十才―十二才であるから、大概この位で屠殺されるようである。

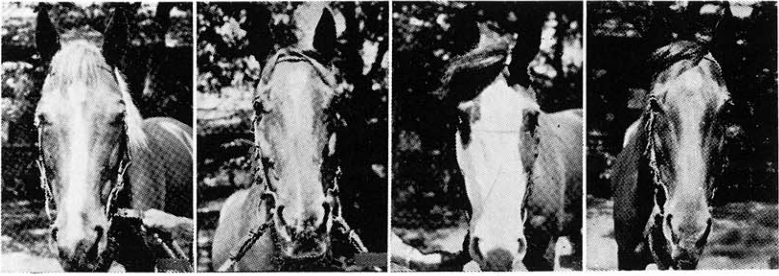
馬はおとなしく、よく人になつて、人のため黙々として働いて居るのに（馬耳東風）とか（馬の耳に念仏）或は（馬脚を現す）など誠に有難くない事の引合に出され、又我が国でも使う言葉であるがアフリカには（馬鹿）という実物が（世界動物博覧会）におつたが、一方（犬馬の勞）という言葉もあり塩原太助の馬のように美しい物語もかぞえ切れない位伝えられている。

人間でもつけ馬や、じゃじゃ馬、頓馬、やじ馬などと呼ばれるものがあるかと思ふと、牛を馬にのりかへるものや人のしり馬にのるものもある。

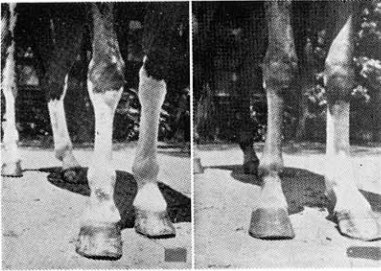
馬に関する伝説も多く、聖徳太子は甲斐の驪駒（くにこま）にのつて富士から信濃路を経て越後に行かれたが、この間、駒は土を踏まず雪をふみ霧をわけゆき須叟にして目的地に到着されたという。

この用明天皇の皇子、聖徳太子の誕生について、母の穴穂部間人太后が、池辺雙槻宮の庭を歩行中、厩戸の前で皇子を出生したので、厩戸皇子と呼んだという。日本書記には聖徳太子の名前として、このほかに豊耳聡、聖徳、豊聡耳などがあげられている。この頃、馬は耳のさとい動物として尊重されていたらしく、聖徳太子の豊耳聡、豊聡耳の名は、太子の聡明である讃辞を含んでいたのだといわれる。

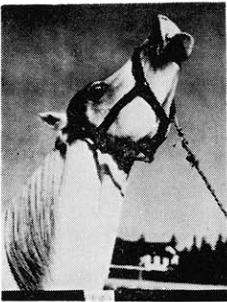
また、死馬がなお主人をのせてかけり、その使命を全うさせたという伝説は各所にあり、また奈良朝の頃から、神社に神馬を捧げる習わしがあつて、その馬は色は黒く尾は白かつたといわれる。



馬 づ ら



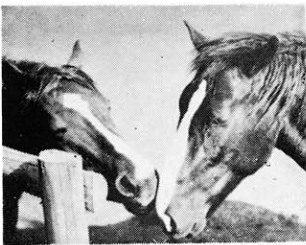
馬
足



求
愛



驚
き



親
愛



物
欲
し

厳島神社の七不思議の一つに「神馬」がある。

はじめはどんな色の馬でも奉獻され、神馬となつて数年たつとかならず白色に変わるのである。現在の馬は、はじめ栗毛であつたが、三年位たつて全身まっ白になつたという。

古墳時代のハニワ馬をはじめ金色きらびやかな馬具が古墳から出るのは馬が重用され貴重視されていた事を物語るものであるといわれる。

なお今日でも神社に絵馬を捧げる風習が残っており、また馬頭観音とか、馬鳴菩薩などに礼拝するのも馬を神聖なものとする考え方からはじまつたものであろう。

馬は絵画としても楽しまれたようである。

清涼殿の唐絵にも、みな書きならはせる事ども、侍り、渡殿には、はね馬、よせ馬の障子を立て、又、同じ渡殿の北辺の朝がれひの前に、うまがたのしやうじ侍り、……

昔、かのうまかたのしやうじを、金岡が書きたりける、夜な夜なはなれて、萩の戸の萩をくひければ、勅命ありて、その馬をつなぎたる体に書きなされたりける時、はなれずなりにけり、と申し伝え侍るは、まことなりける事にや、

とある。

古えは軍事、農耕にさいして神に祈願するには馬を供える習慣があつたが、この習慣は馬の代りに馬を絵にかいて供える事に変つていつた。寛弘三年藤原時代に大江匡衡が馬をえがいて奉納したということであるから比較的早く馬の奉納は絵に代えられたのであろう。後には祈願と信仰に依じて適当な絵を供える風習が生れ、絵馬の

画題は馬だけにかぎらないようになった。

室町から江戸時代になると一流画家に描かせて奉納したのもあつて重文に指定されているものもある。

山都、飛驒の高山は、飛驒の匠たくみと春慶塗と一位彫で知られる。

一位とは木の名前で松より上質で木材中第一位であるとのことから、この名称があり、神官など東帯の時に持つしやく笏はこの木でつくられる。この飛驒の高山で、八月一日の馬頭観音の縁日に、市内に絵馬市がたち、この市で絵馬を買つて、これは家の入口にはつて、牛馬の安全、さらには商売繁盛のおまもりとするならわしがある。

秋天高く馬肥ゆ、の意は

社審言の詩に

雲静カニシテ 妖星落チ 秋高クシテ 塞馬肥

秋の気は澄みて天も高く見え馬も肥えて遅くなる。

漢書趙充国伝に

匈奴到リ秋ニ馬肥コレバ 変必起ル

馬は性、寒を好む、秋に到り馬遅しくなる。この時に乗じて匈奴辺境を侵すの意である。

匈奴は蒙古民族あるいはトルコ族の一派といわれ、その住居は中国本土の北に広がる広大な草原地帯、放牧と狩猟が主ななりわいで、乗馬と騎射を得意とする。春から夏にかけて、はて知れぬ草原で腹いっぱい草を食べた馬は秋になる頃は丸々と肥えている。やがて草は枯れ、草原には厳しい冬がやってくる。つぎの春までの蓄積がなければ馬は飢えと寒さにたえられない。匈奴は冬のかてを求めて暖かい南の本土に押し寄せる。肥えた馬にまたが

り弓矢を携え、つなみのように押し寄せ、財物をかすめては風のように走り去る剽悍な民族で、この匈奴は股の初めごろ興り、周から秦、漢、六朝と約二千年にわたつて中国を悩ました。

秦の始皇帝がその侵入を防ぐため万里の長城を築いた事は人の知るところであり、いにしえの馬の威力を今に伝えられている。

馬にまつわる逸話として山内一豊の話はあまりにも有名である。山内一豊は、もと尾張国岩倉の城主であつた織田信安の家臣山内盛豊の次男である。弘治三年の夏、父と兄とが討死し、一豊は母とともに信安をたよつたが、信安も織田信長のために城をおとされたので、各地を流浪した、信長が越前の朝倉義景をせめたとき一豊は、美濃の豪族、牧村兵部の食客であつたが、織田勢にしたがつて出陣した。ときは元亀元年四月二十五日、一豊二十五才、敗走する朝倉勢のなかに、三段崎勘左衛門という豪ものが出て、信長勢の先頭をきつて突進する一豊めがけて矢をはなつた。矢は一豊の左のほおから右の奥歯まで射とおしたが、一豊はおどりかかつて勘左衛門の首をあげた。そこへ家来がかつけつたので一豊は草鞋のまま顔に足をかけさせて矢をひきぬかせた。一豊は応急手当として柏かしわの葉で傷口をおさえたが、以来定紋を柏にちなんで三葉柏にしたといわれる。一豊はこの手からで信長につかえて、豊臣秀吉をへて徳川家康にしたがつた。

一豊は関ヶ原の合戦後、遠州掛川城主から土佐二十四万石に封ぜられた。土佐はその昔、紀貫之が醍醐天皇の延長八年に国司として赴任し、承平四年十二月二十一日土佐守の任みちて国司の館を出発し、翌年二月十六日帰洛して自邸に入る迄五十五日を要した事は「土佐日記」にしるされており、当時としては辺鄙の地であつたであらう。

以来山内氏は十五代二百七十余年のあいだ土佐を領し幕末には名君といわれる山内容堂があらわれ、薩摩や長州とともに維新の舞台に活躍し藩士には中岡慎太郎、坂本竜馬、板垣退助等がある。

一豊夫人の名は千代、近江浅井氏の家臣若宮友興の女、逸話は一豊がまだ織田信長につかえていたころ、安土城下に東国一の駿馬をうりにきた。一豊はほしくてたまらないが貧しくて買う事ができなかつた。そのくやしさを妻に話すと夫人は夫の大事に用立てよと親に与えられた金十両を鏡のそこからとりだしてさしだったので一豊は名馬をかい入れることができて、この駿馬のために、出陣ごとに武功をたてることができたといわれる。赤貧あらうような一介の戦国浪人から二十四万石の大名への道、その生涯は波瀾にみちたものであつたが、子孫が一豊の苦難に朝夕感銘を覚え、深くその意を体し大名としての終りを全うしたのである。一豊夫人の「名馬」の話が伝説であつたとしてもこんな物語はいつまでも語り伝えたいものである。

さて馬の毛を大別すると図表の様に、本毛、尾脇、切毛、込脇、小脇（天尾、熊毛）振、足毛、胴毛（シマ）と分けられるものであるが、一と口に（馬の毛）と云つても名称の違う通り、皆其の毛質が異り、毛の色の違いによつても呼名も違い、従つて其の用途も区々である。

本毛（尾）

馬毛中最も太く且つ長い毛で、相当の剛さを持ち、然かも豚毛の及ばぬ長尺を有する点は他の毛の追従を許さず、その用途は馬糞（洋服用）水囊（裏ごし）其他の織物、ブラシ、刷毛などに用いられ、殊にブラシ業者に取つては其の用途は最も広く、使用各種獣毛中、豚毛と共に雙壁ともいふべきものである

この本毛の仕立てに各種の方法があり、長いそのままのものの中にも洗い仕上げの良否があり、箒状に仕立て

るものや、組毛と称する長さ別に区別されておるものもあり、五―六寸、七―八寸位と僅かづつの差で三尺位迄に抜き分けて組み合せられているのであつて、抜き分けられた長さの差違は毛の太さと硬軟の差違を伴い、その上、色彩の差別もある。

また馬の幼・老・壮による毛の光沢の差、産地風土、馬の種別、採集の季節等、馬の尾一種類だけでも完全に分類すれば数十種類にも及ぶものであつて、これは尾以外の毛にも、また他の動物の毛にも同様の事がいえる訳である。

切毛(尾)

切毛は主として本毛の先を切つた生きて居る馬のもので、毛の太さ、剛さは本毛と大差なきも束ねたる毛の先端が箒状にて毛におちつき無く、長さも本毛の約三分ノ一程度が通例で利用価値も本毛に及ばぬものであるが一般ブラシに使用される。

弁子(尾)

本毛の純白なもので長いものはバイオリンの弓に使はれ、其の外各種ブラシに使用される。

込脇(尾)

長さ一尺以上あり先のある毛の混つたものを云う

お脇(尾)

込脇の先の無いものを云い、太さ、剛さ共に馬毛中、中位にあり、ブラシ製作面に於て其の特異の持味は、此の毛に依存される面も少なくない。

白しろ太た(尾)

尾脇おしの純白なものを云い、一般ブラシ、刷毛に使用されている。

小こ脇わき(尾)

一名熊毛、小丈、或は天尾と呼ばれ、尾の根元に生えて居る為め、馬が尾を振つても短かくて物に触れないため生来の優秀な毛先を持ち、塗装用刷毛、特にペンキ刷毛には右に出るものなく、最優秀の刷毛は此の毛を以て作る。

此の毛には特に区々の寸法が混入して筈状をなしている。刷毛業者は、これを数種類に抜き分け、刷毛の大小に応じ、毛の太さ、長さを、最も適当に区分するのである。

ペンキ刷毛以外の塗装刷毛も優秀品にはこの毛を用い、糊刷毛、人形刷毛、其他の刷毛も、優秀品は多く此の毛が用いられ、また筆にも多く使用されている。

振ま

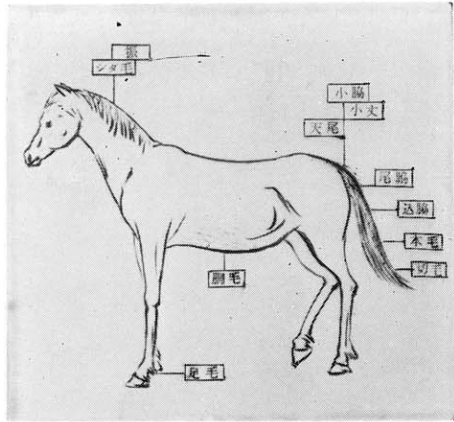
たてがみであり、尾に比べ筋も細く軟かである。この毛の毛先の部分は多くの毛の中でも最も熊毛に似ている(手を掛ける事によつて)ので、ペンキ刷毛等の極上品より少し格の落ちる品を作る場合、此の毛を混ぜ合せて価格を調整するのに利用される事があり、またこの毛だけでも刷毛は作られる。

その外ブラシ、毛バタキ等に使われる。

足毛

四本の足の爪の上に後ろの方向に生えて居る毛で、たてがみより更に細くしなやかな、すなおな毛で、画刷

馬毛の名称



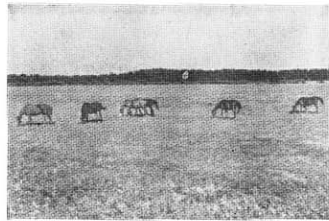
南部の馬産農家



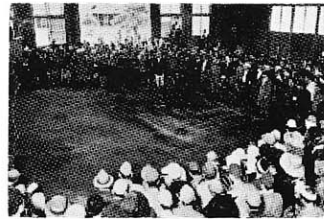
金刀比羅宮の絵馬舎



北海道網走とうふつ湖畔の放牧



三里塚御料牧場



青森三本木のセリ市



馬に曳かれてお嫁入り

毛、ニス刷毛、線引筆等に用いられる。

胴毛

馬の体に生えて居る毛で、胴毛と呼ばれる位で、主として胴の毛であり背の毛は殆んど使用しない。この毛は昔は技術者があつて庖丁で剃つたものであるため、毛も長く取る事が出来たが、今日ではバリカンで刈り取るため、それだけ毛が短かくなつた。業者は(シマ)と呼んでいる。馬の毛色としては前述のように多数に区わけされて取扱われるが(毛)になると赤、青、白というようにかんたんに大まかな色分けがなされており、馬毛中最も細く軟かい毛で、用途も広い。白粉刷毛、ニス刷毛、筆、摺込刷毛、画刷毛、レンズ筆、画筆、鋳物筆などに使はれる。

これ等馬より採集される毛の量は、馬格に依り季節によつて異なり、定めにくい averages 的には、

本毛	六十匁	北海道物	七十五匁〜八十匁
尾	込脇	六十匁	〃
	小脇	三十匁	〜三十五匁
振(たてがみ)		三十五匁	〜五十匁
胴毛		四百匁	〜四百五十匁
足毛		二十匁	〜三十匁

位が標準である

尤もこれは冬期採集されたものの標準であつて、夏期採集の毛は量も少なく質も悪く胴毛の如きは使用にたえ

ぬものもある。しかし使用にたえぬ屑毛も剣道用具、クッション其他の詰物に利用し、其の又屑は肥料になる。北海道で採集される尾は毛の量が多いが、込脇以下のは毛先の悪い特質を持つている。

関東以北で採集される尾は黒毛と赤毛の割合が赤毛二割位の混入であるが、関西、特に九州で採集されるものは赤毛四割位となりこの赤毛は総じてしなやかな毛が多い。かように地方によつて毛の色に特色ある理由は獣の毛は一種の酵素の働きに由来するといわれるが、多少はその環境に適応しているともいわれる。人間も家の中にばかりいるとナマツ白くなるが、冬になつて雪のある地域に棲む動物で毛の色白くなる動物もある。北極熊や北極狐は体熱を発散させないため、寒気生活に適応している、或は白いと目につかないから適応しているともいわれている。

国産馬毛の毛色は遺伝によると考へられているようである。

馬は祖先の野馬の時代は一色であつたものが風土、外界、飼養、使役、はん殖などの関係で現在のようになつたのであるが、昔南部領では七戸青、五戸鹿毛といわれ、薩摩藩では喜入青、市成栗毛と呼ばれたように、その土地土地で同じ毛色の種馬によつて蕃殖し、その生産馬の毛色が統一されておつて、ある地方では青であり、また栗毛であつたということもあつたようであるので、その影響によるものとも考えられる。

九州の誇る肥後の活火山阿蘇の大草原、草千里に牛馬合せて四万頭といわれる大群が放牧されていて（肥後の赤牛）と呼ばれ、放牧も牛が主であつて全部赤牛で馬も赤いものが多く、各觀光地の觀光客用の乗馬も大部分赤色である。しかし、同じ九州でも大分の木島高原に放牧されている牛は黒牛である。この土地が黒い石の散在するところなので

高原に車とどめてながむれば

これは石なりこれは牛なり

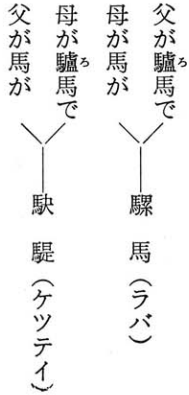
などといわれているが、これらも祖先よりの飼養、蕃殖の関係によるものであろうか。

長野県で採集されるものは、その毛質も光沢も最も優秀なのであるが、馬毛も他の獣類の毛と同様で、その採集時期に依つて毛の量も異なり毛の質にも優劣の差があり、十二月より三月迄に採集されたものを最良とすべきで、殊に尾の如く一頭分に対する建値では、夏季のものは毛質が悪く量も少ないので、成る可く冬季の毛を買付ける様、注意が払われている。

以上は標準馬の事であつて馬格の小さい中馬・小馬等は毛が軟かく其の品種・量共に標準馬に遠く及ばない。

騾馬も尾はすなおなよい毛質であるが、タテガミは短かく六・七寸位迄の長さで、毛筋も細く驢馬のタテガミと大差ない。

騾馬は馬と驢馬の交配したもので



である。

騾馬について

(故事成語) に

駿馬なり、玉篇に「生^レ七日超^レ其母^一」

とある。

驢馬というと、小型のアフリカに野生していたものを飼いなしたものを想像されやすいが、この場合の驢馬は大型の支那驢馬である。これももとは野生のものを飼い馴らしたものであるが、熱帯産の驢馬よりはるかに大きい。

この支那驢馬も尾は馬と大差ないが、振(タテガミ)は長さ五六寸位のもが多く、量も極めて少なく毛質も細く毛先にもみるべきものがない。

騾馬は馱馬として優秀で馬より長命であるので明治時代驢馬を輸入して、馬と交配させたのであるが、騾馬からは子を得る事が出来ないので交配は中止されているとの事である。

馬毛は支那、蒙古、アメリカ、カナダ其他、各方面から輸入されており、中には規格の分類、収束技術等に於てはすぐれたものもあるが、毛そのものの質は国産馬毛に遠く及ばない。

ひと頃(特四吋)の名称で輸入されていたのは、蒙古馬の毛である。馬毛のみならず総べて毛類は天産物というべく、その質は氣候風土の影響に左右せられ、また馬の価値も毛色でなく、その能力である事はもちろんであるが毛色は栄養の鏡といわれ良毛をもち毛色に艶のあるのがよいので、健康状態から気分の快不快までを毛の状態が無言のうちに語っているといわれ、前述の一つの名称のもでも、その実質は多種多様にわたり複雑を極め、これが完全な識別は、多年の経験による以外方法はないであろう。

熊毛の語原

尾脇(天尾)を熊毛と呼ぶ語原については

- 一、熊の毛に似ているから
- 一、駒毛の転訛したもの

との両説があるようであるが尾脇は専門的にみて熊の毛には似ていないので後者の駒毛の転訛したものとの説が妥当のように思われる。動物学上から云えば馬というのであるが地方によつて若い雄馬或は種馬を駒と呼んでおり字典にも(駒は雄馬)と記されているのである。

馬の郷土玩具は国内各所で作られており特に馬の産地に多いようであるが、

和歌山の 土馬

弘前の 木馬

青森の 八幡馬

というように馬と呼ばれるものと

宮城の 木下駒

福島の 三春駒

長野の 桐原の駒

などのように駒と呼ばれるものがあり、その起原にはそれぞれの由緒があるのであるが駒と呼ばれるものには勇ましい由緒にもとづくものが多いようである。

福島県の三春駒の由来は

物語りは約千四百年前にさかのぼる、坂上田村麿將軍が東夷征討に向うに先だち、京都清水寺の延鎮上人が仏像を彫つた余材で、百疋の鞍馬を刻んで將軍に贈つた、彼はこれを鎧櫃におさめて出発したのである。

そして三春城外大境根山のほらあなに住む、大多鬼丸征伐のときに、遠路のため將兵がつかれ苦戦となつたそのとき、何処からともなく百疋の馬が集まつてきた。將兵たちは大いに喜び勇み、この馬に打乗り攻めてて遂にこれを滅した。

ところが將軍が凱旋するときにはこの馬は何処ともなく消え去り、一疋だけが全身汗まみれになつて現在の高柴部落に残つたのである。これを里人の杵阿弥という人が拾いあげ、九十九疋をつけたして家に伝えたが、三年後にはこの一疋の馬も行方不明になつてしまつたという。のちに杵阿弥の子孫がこれを模作して村の子供たちに与えたところ、皆、丈夫に成長したと伝えられているのである。

と誠に雄壮な物語りである。

仙台の木下駒を売る国分寺木下薬師堂は仙台市宮野原の南、木下町にあり、聖武天皇の勅命によつて建てられた陸奥国分寺である。現在の薬師堂は文治五年、源頼朝の奥州征伐のとき戦火に焼けたものを、伊達政宗が慶長十二年に再興したもので、細部の手法は桃山時代の風格を残しており、現在は国宝になつている。

祭礼は旧暦三月三日で、その時売られるのが「木下駒」である、別名青葉駒とも呼ばれており、起源は、昔この神社で催された馬のセリ市に、良馬を選んで、時の帝に奉る習慣があり、選ばれた馬が都に上る時には非常に賑かな儀式をする、そして選ばれた馬は胸に馬型のお守りをぶらさげて上京したのである。



ブラシで皮膚を清掃



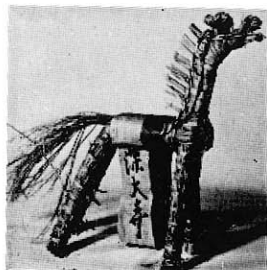
都市の鞍馬



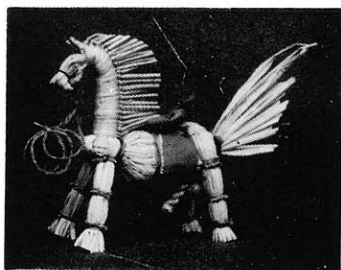
八幡駒（八戸）



三
春
駒



深大寺の赤駒（東京）



桐原駒

後年このお守りが「木下駒」と呼ばれ、馬の守護信仰の玩具として売りだされたものである。

東京都北多摩郡神代町深大寺で藁駒を作つて売つてゐる。深大寺は「浮岳山昌楽院深大寺」といつて天平五年（西暦七三三年）に開かれ当時は法相宗であつたが、開かれてから百年ののち、清和天皇の貞観年中に、武蔵国司藏宗の乱があつて、その降伏を祈念するため朝廷の命をうけ天台の高僧恵亮和尚が東国に下り深大寺をその道場にさだめ逆賊降伏の修法をおこなつた。乱おさまつてのち、その功により近隣七ヶ村を寺の領地とし、深大寺を恵亮和尚にたまわり、そのときより天台宗にあらためられた。

深大寺と藁駒との関係は格別深い意味があるわけではなく、この地方の民話に取材したものである。

万葉の古歌にある、この地方の防人の妻が、夫の九州への出陣に、そのころ武蔵野に放牧されていた馬、特に赤い馬をどうしてもとらえることが出来ず、夫の出陣に馬を贈ることの出来ない淋しさを歌つた古歌に取材したものとといわれており、藁駒にも赤駒と春駒とがある。

万葉集にある豊島郡上丁椋椅部荒虫の妻宇遲部黒女の歌

吾が駒（赤駒）を山野に放し、捕り不得て、

多摩の横山、徒歩ゆか遣らむ

夫を乗せて発たせたいと思う馬は、放し飼いにしてあつて、捕え得ず、そのために武蔵野の雨に果てるあたり、あの横山の道をば、歩いて行かせねばならないのか、広々とした武蔵野の原野を行く旅、長く長く続く低い原野を丘陵を過ぎれば、次の原野を丘陵を目ざして、野の中の道を、山道を、徒歩で行かねばならぬかと、妻の嘆きの歌である。

防人は王朝時代西国辺境の地を守備するためにおもむく兵士のことである。文化二年正月孝徳天皇が制定したもので、大宝の制度では諸国の兵を三年づつ交代でその任につかせたのである。交通不便にして疫病に対する予防措置のなかつた当時としては辺境の地に行くことは、終戦前の出征と同様、苦しい、いやなことだったのである。

防人と立ちし朝明の金門出に手離惜しみ泣きし児等はも

この歌は当時の防人に征く人々の気持を素直に云い表わしている。

なほ北多摩郡一帯、大泉などの農家では、古い武蔵野の放牧時代の名残りであろうか、旧暦の七夕に、カヤで二匹の駒を作つて飾る風習があり、土地の人は「ちがや駒」といつているが、男の馬は首をあげ、女の馬は首を下げた男女一对の駒で雅味にとんだものである。また長野の桐原の駒は藁製のものであるが、たくましい男のシンボルが雄大につけられている。

古い歌に

咲いた桜になぜ駒つなく駒が勇めば花が散る

とあり

琵琶歌の桜狩りに

進むる駒のたてがみに・・・・・・・・

ともあり

義太夫の一の谷に

駒のかしらをたてなおし……

とあつていづれも駒の潑刺とした勇ましさを象徴する感覚が表現されている。

信濃国の駒ヶ丘はその頂上に天空をかけめぐる神馬がいたとの伝説から駒ヶ丘の名がある。

即ち駒とは馬の老若雌雄中、成壮年期のものを指していること明白であり、毛の質もまた、老齡の馬や幼馬の毛は壮年期の馬毛に及ばないので、この意味からも駒毛は馬毛中最も優秀なものとの解釈が成りたつのであつて、駒毛とは馬毛の総称でなく最も良質なものと呼称にあたるので

「特に駒毛で作つた刷毛故品質がよいのである」

というような言葉づかいがあつたとしても矛盾にはあらざるものと信ずるのである、よつて

熊毛は駒毛の転訛したもの

との説を適切妥当とみなす所以である。

さてその役目を果した老馬、廢馬は食肉用となるのであるが、屠殺された馬は肉ばかりでなく、その全身をほとんど迄利用される、皮は靴や鞆、雪駄。野球の硬球は馬皮が最上とされており、コールドバン（でん部の革）は靴にもストラップ（革砥）に用いても最高級品である。毛は筆、刷毛、ブラシ、バイオリンの弓、水のう、フェルト、バス織の材料に、内臓は各種薬品に、血はワクチン、骨は箸、編み棒、ヘラ、ニカワ、その粉は特殊ガラス、砂糖の製造に、蹄はグシやボタンに利用される。馬は死後もその全身を人類のために捧げるのであつて、人は皆、身辺にその恩恵を受けているのである。